

薩摩弁と庄内弁の通訳は「謡曲」だった

第 64 回（昭和 32 年卒業） 渡 部 功

昨年は、明治 150 年という節目の年であったため、故郷庄内でも各種行事が執り行われましたが、そんな中、日本最後の内戦という戊辰戦争、特に庄内におけるそれについて纏められた良書に出会うことができました。この書の著者は同窓の阿部博行さん（73 回・昭和 41 年卒業）で、書名は『庄内藩の戊辰戦争』といます。

奥付の著者略歴を見ると、阿部さんは、昭和 23（1948）年鶴岡市の生まれで、早稲田大学教育学部卒業後、山形県立鶴岡中央高等学校、同じく庄内農業高等学校など庄内地方の高等学校で教鞭をとり、退職後の現在は鶴岡市史編纂委員の職にあります。

著書としては、『小倉金之助』、『土門拳』、『石原莞爾』、『黒崎幸吉』など多数あり、平成 5（1993）年、『小倉金之助』で第 8 回「真壁仁・野の文化賞」（注 1）を、平成 9（1997）年には『小倉金之助』、『土門拳』で第 40 回「高山樗牛賞」（注 2）を受賞しています。

『庄内藩の戊辰戦争』の執筆にあたっては、食欲と思えるほど関係する各地を隈なく訪ね、一つの事象や戦闘地から、人物、風俗、背景へと展開する筆の運びは素晴らしいと感じましたので、本会会員諸氏にも一読をお勧めする次第です。

（注 1） 山形県を代表する詩人・文学者・思想家・教育者である真壁 仁（明治 40（1907）年～昭和 59（1984）年）の意志を継承するために昭和 60（1985）年に創設された賞で、県内在住者による優秀な出版物がその受賞対象となります。

（注 2） 庄内が生んだ明治の文豪・高山樗牛（明治 4（1871）年～明治 35（1902）年）の偉業を記念し、昭和 33（1958）年に創設された賞で、庄内地方に居住する文芸・評論・作文の制作事績において著しく地方啓発に功績があり、極めて優秀な作品の発表を行ったものに対して与えられるものです。

ところで、この書の 249 ページに庄内藩の酒井忠発（ただあき、第 9 代藩主）・忠篤（ただずみ、第 11 代藩主）父子と薩摩藩の黒田清隆との会見に関する逸話が紹介されており、非常に面白いと思いましたが、関係する部分を次に抜き書きしてみます（ただし、本文のカッコ内書きと注記は、筆者が行いました。）。

（1868（明治元）年 9 月（太陽暦では 11 月））

・・・城が明け渡され、西郷吉之助（隆盛）・大山格之助（綱良）・船越洋之助（東北遊撃軍将参謀）が鶴ヶ岡に入った。

28 日（12 日）、西郷・黒田・大山が城中を調べ、接收した武器を見分し、洋式大砲 30 門、百刃車台砲約 100 門・小銃 4,900 挺余・大砲の弾薬 5,500 発・小銃の弾薬 24 万 3,900 発・火薬 3,300 貫などが接收された。

西郷の宿舎は城下神楽橋畔の旅館加茂屋文次方（旧七日町、現本町二丁目）といわれている。市中に大入道の西郷という人が来たとの噂があったが、誰一人これを知る人はなかったという。

同夜、忠発・忠篤父子が致道館で黒田と会見し、謝罪した。服部之総（はっとり しそう）（注 1）の「葵と菊 38 度線」（服部『黒船前後』所収）に、「このとき面白い話が残っている。

言葉が通じないのだ。東北と一番南の端だから、菅善太右衛門（注 2）が思いついたと言われているが、扇子で調子を取りながら謡曲（注 3）でもって談判して、互いに通じたようだ。-まこと、支配者の教養である謡曲こそ、相互の意思を暗黙のまま媒介する」との文章がある。・・・

（注 1） 服部之総について、『大辞林』には次のようにあります。

（明治 34（1901）年～昭和 31（1956）年） 歴史学者。島根県生まれ。東大卒。1927 年（昭和 2 年）、「マルクス主義講座」「に「明治維新史」を執筆。「日本資本主義発達史講座」に参加。幕末・明治維新

研究に尽くした。著『黒船前後』、『維新史の方法論』など多数。なお、本名は、「之総」と書いて「これふさ」と読むそうです。

(注2) 庄内藩中老、菅 実秀の通称です。通称とは、正式ではないが世間一般に通用している呼び名のことで

す。

(注3) 謡曲について『大辞林』には次のようにあります(ただし、カッコ内は筆者が加筆しました。)

①能の詞章(文字によって表現された言葉)。②能の詞章だけを謡う芸事。本来の演能に含まれる役者の動き、囃子(はやし)、間狂言(まきょうげん)を除外、シテ(主役)、ワキ(脇役)、地謡(じうたい)、シテ、ワキの発言でなく、状況説明や情景描写を謳う人々などの分担を行わず、詞章全体を一人で謡う。

以上ですが、インターネットで謡曲について検索をしてみたところ、能を研究している大阪大学文学部の中尾 薫准教授は、『江戸時代、能は武士の教養、嗜むべき技芸として受容されていた』と言い、一方、執筆家であり私塾を経営している小名木善行氏は『能は、単に武家社会によって庇護されていた芸能文化というだけでなく、実は標準語としての武家社会の共通の文化であった。全国各地、かなり方言が強かった武士は、参勤交代制度による江戸勤務に際してお互いの意思疎通を図らなければならず、そのためには共通語が必要であったが、その共通語に用いられたのが、実は、「御座る」とか「余儀なし」とか「よしな」などといった言葉で、その語源は狂言や謡曲で使用されていた言葉であった。』と述べています。

昨年のNHKの大河ドラマ、「西郷どん」においてふんだんに出てきた薩摩言葉は、低音の部分などは、私にとってなかなか聞き取りにくかったのですが、これまた訛りのひどい庄内言葉とこの難解な薩摩言葉での交渉を、「謡曲」を媒体として用いて相互の意思を通わせたとは、大変興味深い話ですが、一体どのような方法で会話を成立させたのでしょうか、その具体的方法を是非とも知りたいものです。

ところで、近ごろの子供たちの会話において、方言での会話を耳にする機会が減ったような気がします。天童市に住む孫も両親が天童と山形育ちなのに方言らしい言葉を一切口にしません。アクセントは一寸可笑しいのかもしれませんが、ほとんど「標準語」で会話をします。今日では、日本の北から南まで、学校では標準語で学習しているのですから、庄内の子供たちが鹿児島を訪問して地元の子供たちと会話を試みても、また、その逆の場合であっても、当然のことながらお互いの意思疎通を図るうえにおいて何ら問題は生じないのです。